

---

# 神の世界

jnao

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神の世界

### 【Zコード】

N7387Z

### 【作者名】

jnao

### 【あらすじ】

今いる世界とは別に違う世界があった。その世界はありえないことに神がいる。社会があり、国もある。普通に生活する人もいれば、神になろうと意思を使って戦う人もいた。その世界で私は、俺は……。

初投稿です。よろしくお願いします。

## きっかけ（前書き）

初投稿です。自分のくだらない想像？を書きました。  
もし良かったら読んでくれると嬉しいです。

## きっかけ

私は相澤志織。神崎町の中高一貫校、私立神崎学園に通う中学2年生。趣味は特に無く、成績はかなり上。友達も多くクラスの輪にも入っている。自分で言うのもなんだが、「平凡な中学生」だと思つ。

夏休みが終わり、2学期が始まつてすぐに席替えがあつた。私は一番窓側で後ろから2つ目。なかなか良い席なんだけど、友達が近くにいなかつた。あまりうれしくない。周りの席で特に話したことがなかつたのが、後ろの席の最上和輝。学校にはいつもきりぎりで来るし、成績も真ん中、いつもボーッとしていて、何を考えているかわからなかつた。

休み時間になると、最上君は教室を出でていつた。出でいく姿を田で追つていたら、友達の佐藤めいが話しかけてきた。

「席離れちゃつたね志織ちゃん」

「残念だよねー。こここの席最悪だよ。いいなーめいちゃんは、」

そんなくだらない話をして次の授業を受けた。私はめいちゃんを親友だと思つ。でもめいちゃんはどうなんだろう?

学校が終わり、今はもう6時だ。私はバスで通つている。帰る準備をしていたら、最上君がいそいで教室からでて行つた。だからか最上君の鞄から何か落ちたけど、気づかなかつた。

「最上君、何か……」

私はそれを拾つたけど、最上君はもういなかつた。

「ハアー……やばつ、もう時間が」

私もいそいで教室をでて行つた。

## 事件発生（前書き）

2話目です。

## 事件発生

「ハアー、持つてきちゃつたよ、これ」  
バスの中で志織はため息をついていた。

（もう、腕時計はちゃんとつけておいてよね）  
そう、和輝が落としたのは腕時計だった。色はシルバーで高級な感じがあるが、真ん中には穴が空いてある変わったデザインだ。  
（明日学校行きたくないな。）

席替えで近くには友達がいなく、話したことがない人に時計を渡すのは考えるだけで気が引ける。

駅前のバス停に着いた。

（帰つてお菓子でも食べよ）

バスから降りると辺りが騒がしい。

男子高校生達が話していた。

「さつき浮浪者が出て女人が襲われたんだって。」

「マジかよ。ま、俺達には関係ないな。」

確かに警察が事情聴取をしていた。

志織の家は駅から自転車で10分の所にある。

（今日は本当に最悪。）

志織は若干イライラしながらその場をあとにした。

駅から5分ほどすれば、人通りも少なくなつてくる。空は若干暗くなってきた。志織は気づいていた。さつきから誰かが後を走つて追いかけ来るのを。ただの偶然かもしれない。だが志織にはそれがとても怖い。志織はスピードを上げる。すると走つている人もスピードを上げた。志織は頭が真っ白になつた。志織の肩が掴まれた。

## 戦闘（前書き）

3回目です。

「ううーー」

志織はあまりの恐怖に声が出なかつた。

「やめて…やめてください。」

「おー、ちょっと待てよ。なんで逃げるんだよ。」

志織は驚いた。なんと声の主は和輝だつたのだ。

「なんだ、最上君か。なんでこんな所にいるの？」

「なんでじゃないよ。相澤さん、俺の時計持つていいんでしょ？返して貰おうと思つてたんだけだ、逃げちゃうからさ。」

志織はだいぶパニックでいたようだ。

「あはははー、そうなんだ。タイヘンダネー。」

「……もしかして浮浪者だと思つた？」

「イヤイヤ、ソンナコトナイヨ。」（汗）

「……どうでもいいから時計返してくれる？」

「どうでもこいだつて？レディーに向かつてそれは失礼じゃない？」

（怒）

「相澤さん、怖い。」

「オイオイ、漫才はそこまでこしてくれないかい？」

『つつつー』

ふーんは驚いた。急に第三者が会話に入つてきたのだ。

「なんのよリだ？」

和輝はあきらかにガラの悪そうな男に聞いた。

「マインドチユーンは金になるからな。」

「それは違法なはずだぞ。だいたい誰が渡すか！」

志織は一人のハについていけなかつた。

（マインドチユーン？ 違法？）

「なーば……」

男はそう言にポケットから棒のようなものと腕時計を取り出し、時

計を腕につけた。

「力ずくでもらつぐー！」

腕時計から鎖が出てきて棒のよつなものの先につけた。するともう片方の先から槍のよつなものが出てきた。

「オラアアア。」

男は槍のよつなものを構え走ってきた。

「クソつー！」

和輝は舌打ちし志織を抱きかかえ男から逃げた。

「ちよつとなにすんの？」

「いいからお前は俺の時計をよーこせ。早くー。」

「う、うん。」

志織はよくわからぬまま鞄を探し始めた。

「逃げんじやねえぞ！」

男は時計から鎖を外し、槍のよつなものを投げてきた。

「クツ！」

和輝の左腕に刺さってしまった。血が出ていた。志織はこんなに血が出ていたのを見たことが無く吐き気がした。

「最上君、血が。早く警察を……」

「いいから、と、時計を。」

「何をするの？早く逃げなきや。」

「これで終わりだー。」

男は和輝に刺さっている槍を抜き、どどめをたたうとした。

「やめてーー！」

志織は叫ぶと和輝の持っていた鞄からオレンジ色の光が漏れ出した。

「まさか、こいつが？」

「なによそ見してんだよ。死ね！」

「死ぬのはお前だ」

和輝の手にはいつの間にか剣が握られていた。

「な、なに？」

男は何が起きたか分からぬらしい。だが男の槍と時計は粉々にな

つていた。

「クツソ。覚えている。」

男は臭いセリフを吐き捨ててその場を去つて行つた。

「チツ、仕留め損ねたか。」

志織はその姿を見ても、信じられなかつた。同じクラスメイトが血だらけになつて剣を握つている姿なんて。

「最上君、私……」

志織も和輝から逃げるようにその場を去つた。

戦闘（後書き）

なんかもう文がわけ分からぬ所があるような気がします。  
もし良かつたら指摘してくれると嬉しいです。

ナウヒヤー・ナウヒヤー

志織は今お風呂に入っている。

(さつきは何だったんだろう?)

志織はさつきの和輝の事を考えていた。

(夢? 幻?)

志織の常識が壊れつつあった。

(明日どんな顔して会えれば良いんだろう?)

次の日

「なんだ最上はまた来てないのか。」

担任の先生が出席を取っている。

(やっぱり学校にこないのかな。)

志織は心配していた。昨日あれ程の傷を負ったのだ。

「すみません、遅れました。」

そう言つて和輝が教室に入つて來た。

「なんだまた遅刻か? いい加減早く来るようになしる。」

(昨日の傷、大丈夫なのかな? いつもどうり見たいだけど。)

朝のホームルームが終わつた。

(やっぱり話しかけるべきかな?)

心配は考えていた。だが、学校では一度も話しかけたことがないのでやはり緊張する。すると

「昨日は大丈夫だった? 相澤さん?」

いきなり和輝が声をかけてきた。

「つつ! うん、大丈夫だったよ。」

志織は声が裏返つてしまつた。

(そう? どこか痛かつたりしていない?)

(うん、あんなこと初めてで怖かつたけど……。)

そんな会話をしていると

「痛い 初めて 怖かつた?」

「マジかよ。相澤さんと最上が?」

「ウソ?」

「ウソ?」

教室が騒がしくなった。見ると志織は顔が真っ赤だ。

「ちよつ、ちよつときて最上君。」

ふーんは教室から逃げるよつて出した。

一人は校舎の裏に来た。

「どうしたの? 相澤さん?」

「どうしたの? ジヤないよ、もつ。」

どうやら和輝は鈍感のようだ。

「?まあ、どうでもいいけど、はいコレ。」

和輝からオレンジ色の腕時計が渡された。

「これは?」

志織は不思議そうに渡された時計を見つめている。

「ちゃんとつけててね。」

そう言って和輝はその場をあとにした。

「う、うん。」

志織は時計をつけようとした。

(高そうな時計だな、ん?)

時計には和輝のものと同じように六が空いてあり、裏に 相澤 志  
織 と書かれてあった。

## 時計（後書き）

漢字古手です。間違えている所もあると思います。スミマセン。

志織は教室に戻った。するとめいが話しかけて来た。

「ねえ、最上君となに話してたの？」

「べ、別に。たいした事じやないよ。」

「ふーん。もしかして付き合つてる?」

「そんなわけある訳ないよ。」

「ふーん、そーなんだ。」

めいは少し嬉しそうな顔をしていた。

（もしかしてめいちゃんは最上君のこと好きなのかな？）

そんなことを考えていたら次の授業の先生が来たので席についた。  
(どこが好きなんだろう? 確か女子と喋っている所なんて見たこと  
ないんだよね。)

【だつて喋ることないんだもん。】

「え?」

おもわず後ろを向いてしまった。

「相澤、なにしてる?」

「す、すみません。」

先生に注意されてしまった。

（あれ? おかしいな。確かに最上君の声が聞こえたような?...）

【気のせいじゃないよ。】

志織はまた後ろを向く。

「相澤!」

「すみませんでした。」

【「ゴメン」「ゴメン、まあ落ち着いてよ。】

志織には意味が分からない。

【驚かせちゃってごめん。でも凄いだろ?。心で話せるんだが  
(どうやってんだろ?....)

【簡単だよ。心で話したい相手を思つて話すだけ。本を読む感じだ

よ。】

【……や、聞こえる？ 最上君。】

【ああ、聞こえるよ。】

【これって考えていることもわかるの？】

【ああ、さつきのことね。慣れれば分かるようになるよ。】

【……これってどうやってやめるの？】

【時計の左下のボタンを押せば……ちょっと待て！ まだ用があるんだけど……クシス。】

【……なに？】

【だって相澤さん、何も考えないよ！ にしていて、それが……ブッ。】

【……（怒）】

【ゴメンゴメン、今日の放課後一人で待つててね。大事な用があるから。もうボタン押していいよ。】

【】

【】

【最上君？】

【ん？】

【昨日のあれって、私を助けてくれたの？】

【……偶然だよ。】

【ありがとう。】

【】

それから少し経つたら授業が終わった。授業が終わるとすぐに和輝は教室を出て行つた？ 志織には和輝の顔が少し赤くなつていたようになつた。

## 心の論語（後書き）

【 】であることをいたします。  
勝手に入りマセ。ン。

時はすでに放課後。志織は一人で和輝のことを教室でまつっていた。もう時間なので志織はそろそろバスへ向かわなければいけない。

「待たせてごめん。ついて来て。」

声の主は志織を待たせている張本人、和輝であつた。

「最上君、私もう帰らなきやいけないんだけど。」

「まあまあ」

二人は校舎裏に来た。

「相澤さん、大事な話があるんだ。」

（……まさかこの状況は告白？ええ？ウソ？確かに昨日助けてもらって、急に話す機会も増えたけどいきなりじゃない？でも今までろくに話したことないんだよ。それにめいちゃんは最上君のこと好きなんじゃ？……。）

「聞いてる？聞いてますか？相澤さん？」

「ああ、ごめん。それで話つて？」

「うん、その時計の事なんだけど。」

和輝は志織の腕時計を見ている。

「そう言えばなんでこれで心で会話できるの？それに昨日は……。」

「ああ、説明すると長いから……行つたほうが早い。」

「行く？行くつてどこに？」

「腕時計の左上のボタンを押して、」

「ねえ、ねえつてば！」

「次に穴を触つて、穴を前に突き出す。

志織も同じようにやつた。すると穴から光が出て目の前に丸い光の扉のようなものが現れた。

「なに、これ？」

「いいからいいから、光の中に入つて。」

和輝に背中を押され、光の扉を通りすぎたら

「わあ - ツツ！」  
地面がなくなったような感じになり、下に落ちながら視界が真っ白になつた。

## 意思の力

目を覚ますと志織には信じられない景色が広がっていた。まず、こ  
こは校舎裏ではない。それに目の前にはビルが立っていた。そのビ  
ルを囲むように塔が五本、いや、志織の後ろにも塔が一本立つてい  
る。計六本の塔から人が出入りしている。志織はだれもいなかつた  
はずなのに、いきなり塔から人が出てきた所を見た。おそらく志織  
も同じようにここに来たのだろう。志織はビルに向かう和輝につい  
て行つた。

「ビルの中は外から見るよりも広々としていた。すると  
「新人の方ですね。右側の部屋へ向かってください。」

「頑張つて。」

と受付係の人と和輝に言われた。指示された部屋には 訓練室 と  
書かれてあつた。おそるおそる部屋へ入ると、髪が長く、スーツを  
着ている知的そうな男性がいた。

「貴方が相澤志織さんですね。どうぞこちらにお座りください。」  
志織は差し出された椅子に座つた。

「私はボルグと言います。おそらく相澤さん、貴方は今ご自分の身  
に何が起きているかご存知ないでしょ。ですがご安心ください。  
貴方のような新人にこの世界の知識をお教えるのが私の役目です。」

「少し間を開けてからボルグは話を続けた。

「貴方が住んでいた世界とは違う世界、この世界はテオスと呼ばれ  
ています。テオスとはギリシャ語で神という意味です。そう、この  
世界は神によつて作られたとされています。そして貴方が持つてい  
るその時計、それがこの世界へと来るいわばチケットなのです。そ  
してその時計は他にも様々な機能があります。例えば、テオスに繫  
がる扉を開いたり、心で会話するなどです。その他にもたくさん  
機能があります。次は実践です。あちらの扉へお進みください。」

そう言わると向こうに地下へと続く扉が現れた。

地下には何もない広々とした空間が広がっていた。

「IJの世界では意思を形にする事ができます。まず時計に空いてある穴から鎖が出ている様子を想像してください。」

そんなバカなと志織は思った。しかしボルグの腕時計から灰色の鎖がでている。

「まあ、やってみてください。」

志織もやってみる。だが鎖はでない。

「中途半端ではダメです。鎖の一ひとつまで正確に想像してください。」

（想像、想像……。）

すると鎖がでた。志織のはオレンジ色の鎖だ。

「おお！なかなか飲み込みが早いですね。普通なら少なくとも1週間はかかるはずなんですが。素晴らしいです。」

「そうですか？」

しかし、志織の鎖は消えてしまった。

「意識を集中させていないと消えてしまします。しかし、鎖が出せればあとは何でもできます。例えばこのように。」

そういうとボルグは鎖が光の玉にし、玉を壁に向かって投げた。すると玉は壁にぶつかり、壁は粉々になった。

「物を作ったり攻撃したり、貴方の思った通りになります。

地下から出ながらボルグはいった。

「なぜこの様に意思を形にできるかわかりません。しかしこの力是非とも役立ててください。期待しています。今日はお疲れ様でした。」

志織は訓練室から出てきた。すると和輝が話しかけた。

「どうだつた？」

「……意味分からなかつた。」

「まあ、確かに。でも慣れて行くよ。それよりももう時間だから帰ろ。帰る時は、あの六本の塔のうちのどれかにはいればいいからね。」

二人は元の世界に戻った。

二人は校舎裏に戻ってきた。

「へえー。扉を開いた所に戻つて来るんだね。……あつもう時間が帰つたら怒られちゃうな。」

志織は慌てている。時計はもう19時をすぎていた。

「大丈夫。これがあればすぐに家に帰れるよ。」

和輝はそう言うと時計を叩いた。

「でもどうやって？」

「ボルグに言われただろ？ 意思を形にできるつて。つまりはやく家に帰れる物を想像すればいいんだよ。」

「なるほどね。……あれ？ 鎖がでない？」

「まあ、慣れが必要だからね。いいよ。今日は俺が送つていくから。」

「そう言うと和輝は鎖を出した。色は銀だつた。和輝は鎖を握ると鎖は光の粒になり、絨毯を作つた。

「これって魔法の絨毯？ 可愛い発想してるね。」

「う、うるさい！ 送らないよ。」

「ふふッ、ゴメンゴメン。」

二人は学校からでた。

「相澤さん、動きにくいんだけど。」

「だつて落ちちゃう。」

二人は人が豆粒位に見えるまで高い所にいた。あたりはもう暗い。

一般人には一人の姿を見ることはできないだろう。こんな経験をした事のない志織はビビっていた。なので志織は和輝に抱きついた。

(気まづい……)

和輝は何とかこの空気を変えようとした。

「相澤さん、まるで人がゴリのようだ。あはははは～」

「そうだね。」

和輝は頑張った。しかし志織には心の余裕はなかつた。それに和輝は話上手ではない。本格的に気まづい空気が流れた。そんな空気の中、志織は話かけた。

「最上君？」

「なに？」

「いつからテオスに行けるようになったの？」

「ちょうど一年前かな？」

「ふーん」

(……なるほどね。)

和輝は志織が本当に聞きたいことに気づいた。

「相澤さん、相澤さんは前の俺みたいに血を流すほどの戦いをする事になるかもしれない。俺も最初は嫌だつた。」

「……」

「でも、テオスには楽しいこともあることもわかつた。無理にとは言わない。でももしよかつたら今日もう一度テオスに来てほしい。

「……もうついたよ。」

「……ありがとう。」

二人は志織の家の前で別れた。

今はもう22時だ。志織はテオスに行くかどうか迷っていた。自分の知らない所に行くのは誰だつて勇気がいる。志織は和輝の言つていたことを思い出した。

(テオスにいつたら最上君に会えるにかな？……会いたいな。)

そう思つたらいてもたつてもいられなくなつた。

（テオスに行つている間に何かあつたらめんどくせこな。）「お母さん、私もう寝るから。」

「どうしたの？急に？」

「どうせHなことでもするんでしょ。一人にさせてあげなよ。」

香織がなにか変な事を言つていたが、志織は気にしなつかった。  
(確かに左上のボタンを押せば……あれ？、そう言えば服つてそのま  
まだよね？着替えないど。)

いろいろと準備をしてから志織は再びテオスに向かつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7387z/>

---

神の世界

2011年12月31日21時51分発行